

(西暦) 2022 年度 博士後期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

Evaluation of Radiation Exposure Literacy among Mammography Examinees Using Radiation Dose Distribution in Mammography Examinations

マンモグラフィ検査における被ばく線量分布を用いた受診者の放射線被ばくりテラシーの評価

学位の種類: 博士 (放射線学)

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士後期課程 人間健康科学専攻 放射線科学域

学修番号 20997703

氏名: 中村登紀子

(指導教員名: 根岸 徹)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

放射線は医療において診断や治療にも不可欠な存在であり幅広く利用されているが、その反面、被ばく線量の増加が懸念される。また日本では近年、晩婚化や高齢出産が増加の一途をたどり、初めて出産する女性の平均年齢と乳癌罹患数が増え始める年齢とが一致している。その為、40 歳代からのマンモグラフィを用いた乳癌検診対象者には妊娠を意識した女性が多く含まれることが推測され、マンモグラフィ検査時の被ばく線量には注意が必要である。更には、Digital Brest Tomosynthesis という乳房を任意の断面で観察できる撮影法の併用により被ばく線量の増加も懸念されている。

現代の医療事情において、患者が自分の病状を主体的に管理し、検査や治療といった医療に関するさまざまな意思決定に積極的に関わることが求められる。そのような意思決定を適切に行うためには、患者個人のニーズに即した包括的な情報が得られていることが重要となる。これまで、検査や治療といった医療に関する情報の主要な情報源は、医師を始めとする医療専門職であることが多かったが、専門家ではない一般の人々が様々な医療情報についてインターネットを介して発信することも容易になってきた。その一方で、発信された情報には誤った情報も多く流布するようになり、その中から信頼できる情報、自分にとって有用な情報を見分け、活用していくための能力が重要となる。このような背景の中で注目されているのがヘルスリテラシーである。これを高めることで自ら情報を効果的に意思決定し、行動をとることができるようになる。しかし、患者が専門的な医療情報を入手したとしても、理解し行動することはなかなか難しい。その上、医療従事者による検査説明は患者が得ることのできる情報の 1 つであるのにも関わらず、放射線検査においては検査方法の説明はあるものの、患者への被ばく線量の開示や説明はあまり普及していない。

そこで、マンモグラフィ受診者を対象に、無記名式自記式質問票にて調査を行い、放射線被ばくりテラシーを評価した。受診者の放射線被ばくりテラシーを情報源に対して、「様々な情報源からの情報収集」、「自分に必要な情報の選択」、「情報の理解と伝達」、「情報の信頼性の判断」、「情報に基づく計画や行動」の 5 つの尺度を用いて評価し、基本属性との関連を分析した。そして、基本属性の違いによる線量分布図を用いたマンモグラフィ検査時の被ばく線量に対する理解度の差を比較した。

その結果、放射線被ばくりテラシーが「情報収集」できるレベルに達していた受診者は、被ばく線量についての理解力も高い傾向にあったが、そのレベルに達していたとしても、

被ばく線量の減少につなげる行動ができることとは別であることが明らかとなった。線量分布図を用いたマンモグラフィ検査時の被ばく線量に対する受診者の理解度は、基本属性すべてにおいて有意差が認められた。つまり、マンモグラフィ検査における被ばく線量を線量分布図として視覚的に情報を与えることで受診者の放射線被ばく線量についての理解を深めることが可能となり、放射線被ばくりテラシーを把握し、基本属性と照らし合わせることで、個人に合わせた被ばく線量情報提供方法の展開への示唆を得ることができる。そして、放射線被ばくりテラシーの向上は安全な医療の提供をしていくことに必要な受診者のスキル構築が可能となる。